

〔研究報告〕

認知症の親を自宅で介護している息子が感じる困難

長澤久美子¹⁾ 荒木田美香子²⁾ 千葉のり子¹⁾

要 旨

高齢者人口の増加に伴う認知症高齢者や、世帯構成では「親と未婚の子のみの世帯」の増加や、男性における生涯未婚率の増加の傾向等から、自宅で親を介護する息子（以下息子介護者）の増加が予測される。息子介護者では、高齢者虐待が全体の約4割を占め、介護離職の増加とともに、今後の課題と捉えられる。

そこで本研究は、認知症の親を自宅で介護している息子を対象にインタビュー調査を行い、介護生活を行う上で感じている困難を明らかにすることを目的とした。

対象は息子介護者9名で、半構造化面接を行い、質的記述的に分析を行った。

その結果、息子介護者は、【要介護者と思うように意思が伝わらない】ことや、介護生活では【気持ちを切りかえないと介護できない】こと、【要介護者の体調管理は思うようにいかない】こと、【家事や介護には慣れない】こと、【女性物の衣類への抵抗感がある】こと、【家族と意思の疎通ができない】こと、仕事をしている息子介護者は【介護と仕事との両立ができない】こと、さらに【将来への見通しが見つからない】こと、という困難を感じていた。

キーワード：息子介護者、在宅介護、困難、認知症

1. はじめに

総人口に占める高齢者割合の増加（内閣府、2017）に伴い、「世帯構造別にみた65歳以上の者のいる世帯数の構成割合」の「夫婦のみの世帯」は2010年の29.9%から2015年には31.5%に、「親と未婚の子のみの世帯」は2010年の18.5%から2015年には19.8%（総務省、2017）と、それぞれ増加している。一方、介護者と同居している主介護者の割合は、2010年の64.1%から2016年には58.7%に減少している。しかし、その内訳を2010年と2016年とで比較すると、それぞれ「配偶者」は25.7%から25.2%に、「子」は20.9%から21.8%に、「子の配偶者」は15.2%から9.7%（厚生労働省、2011；厚生労働省、2017）というように、介護者である「配偶者」の割合には大きな変化はないが、「子の配偶者」は減少し「子」の割合は増加している。

男性が在宅で介護する割合も、2010年の30.6%に比べ2016年には34.0%（厚生労働省、2017）と増加傾向にあり、今後更なる増加が予測できる。また、男性生涯未婚率も、2000年の12.6%から2015年には23.3%（国立社会保障・人口問題研究所、2017）と増加しており、前述の「親と未婚の子のみの世帯」や子が介護する割合の増加を加味すると、今後自宅で親を介護する息子の増加が予測できる。

介護者である息子を対象にした先行研究では、介護の動機は親への肯定的感情や義務感・愛情（横瀬、2010；鈴木、彦、金川他、2013；宇多、都筑、金川、2017）、困りごとでは家事・経済的なこと・自分の時間がない・外出ができないこと（鈴木、

1) 常葉大学健康科学部看護学科

2) 国際医療福祉大学小田原保健医療学部

彦, 金川他, 2013; 宇多, 都筑, 金川, 2017), 介護と就業の両立 (彦, 鈴木, 金川他, 2013), 介護形態の特徴では, サービスの外部移譲の傾向や介護支援専門員が関わる機会が得にくい (上田, 荒井, 山西, 2007; 横瀬, 2010) 等が報告されている。また, 自宅で介護する虐待者の続柄では息子が約4割を占めるが (厚生労働省, 2017), その要因は, 介護環境や介護条件・介護負担感, 息子の年齢・性格, 要介護者の要介護度・認知症の有無, 息子との人間関係, 近隣との交流, 経済状態, 介護協力者の有無等である (上田, 荒井, 山西, 2007; 上田, 三宅, 西山, 2009)。また, 認知症の母を介護する息子の研究 (横瀬, 2010) では, 疾病理解の努力はするが, かつての母親像がよみがえり悔しい思いとの交錯の中で混乱し, 虐待への可能性も示唆していた, との報告も見られた。

息子介護者に関する先行研究では, 以上のような内容の報告はあるが, 夫介護者と息子介護者の比較が多く, 息子介護者に特化した研究は少ない。また, 認知症家族を介護する息子からインタビュー調査をした研究も少ない。今後息子介護者の増加や認知症高齢者の増加が予測されることから, 認知症家族を介護する息子の介護生活における困難の要因や状況について, 調査でさらに詳細に分析し, 知見を積み重ねる必要がある。そのことは, 息子介護者に特化した支援に結びつき, さらに介護経験のない息子への介護準備教育にもつながると考える。

そこで本研究では, 認知症の親を自宅で介護している息子 (以下 息子介護者) を対象に, 介護生活を行う上で感じている困難を明らかにすることを目的とする。

II. 用語の定義

困難: 困難とは, 「悩み苦しむこと。物事を成し遂げたり実行したりすることが難しいこと」 (新村, 2008) と定義されている。そこで本研究では, 在宅で認知症の家族の介護を行うことで生じる身体的・

心理的・社会的な悩みや苦勞・辛さを指すこととした。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究。

2. 研究参加者 (以下参加者)

研究者が2012年度の研究 (長澤, 山村, 岩清水, 2015) で関わりをもったA市 (人口約11.4万人 (2013) の地域包括支援センターの介護支援専門員3名に, 認知症の親を自宅で介護している息子15名程度の紹介を依頼し, 紹介を受けた9名に調査協力を依頼し, 全員から承諾を得てインタビューを実施した。

3. データ収集方法

9名の息子に半構造化面接を行った。質問内容は, ①介護をしようと思った理由, ②介護をして印象に残っていることとその理由, ③日々の介護の気付きと理由とし, 自由に語ってもらうよう依頼した。基本属性として, 要介護者の年齢・病名・要介護度・続柄, 介護者の年齢・職業・介護年数同居の有無の情報について確認をした。面接時間は, 1人60分前後で1回行った。9名とも許可を得てインタビューの録音を行った。インタビューの期間は2013年7月~10月であった。

4. データ分析方法

録音した面接の内容から事例ごとに逐語録を作成した。逐語録を繰り返し読み全体像を把握した。次に, 「介護生活を行う上で感じている困難」に関し, 意味のとれる文脈に注目し, 文脈を損なわないよう参加者の言葉を用いながらコード化した。さらに, コードの意味内容の類似性に着目し, 複数のコードのまとまりをつくり, サブカテゴリーを抽出した。全事例を通じて類似性や相違性に注目した上で比較検討し, カテゴリーを抽出した。データ分析は, 老年看護学の教育経験のある大学教員と行い, 地域看護学の専門家からスーパーバイズを受けた。

IV. 倫理的配慮

協力を依頼した介護支援専門員には、研究目的・方法・倫理的配慮を説明し了承を得た。介護支援専門員から、事前に対象となる候補者に研究説明の了承の有無の確認を依頼した。そのうち、研究者が参加者に電話連絡等で日程調整をし、説明のための訪問を行った。訪問時、研究の目的・研究方法、研究参加の利益・不利益、研究への参加は自由意志であること、いつでも断ることができること、断ったとしても不利益にはならないこと、個人の秘密は厳守し、データは研究以外で使用しないこと、発表に際しては個人が特定されないように行うこと、研究終了後録音データや記録等個人的な資料はすべて破棄すること、面接内容を録音する旨について、口頭と書面で説明をした。同意書は、協力の有無を考慮するために時間を置き返送を依頼した。その後、参加者との個別面談を計画した。参加者の都合のよい時間と場所を調整し、プライバシーが守られるように設定した。尚、国際医療福祉大学の倫理委員会の承認を得て行った（承認番号13-Io-87）。

V. 結果

1. 息子介護者と要介護者の概要（表1）

本研究では、息子介護者9名に協力を得た。息子介護者の年齢は、60歳代4名、50歳代3名、40歳代2名、職業は会社員4名（非常勤含む）、自営業3名、無職2名であった。また、介護年数は1～5年

が6名、6～10年が2名、10年以上が1名であった。また9名中6名は要介護者と2人暮らしであった。3名は同居の家族がいたが、主介護者は息子であった。

要介護者の年齢は、90歳代1名で、他8名は80歳代、診断名はアルツハイマー型認知症5名、脳血管性認知症3名、レビー小体型認知症1名、要介護度は、5は1名、4は1名、3は4名、2は2名、1は1名、続柄では母8名、父1名であった。

介護することになった理由は、「長男だから」を含め自己の役割と認識している者は6名、ともに生活していたためが3名であった。現在は、全員自己の役割として捉え、介護を行っていた。

2. 分析結果（表2）

【 】はカテゴリー、《 》はサブカテゴリー、「 」は息子介護者の語りを示す。

抽出されたカテゴリー数は8、サブカテゴリー数は20、コード数は110であった。

息子介護者が、介護生活の中で感じている困難は、【要介護者と思うように意思が伝わらない】【気持ちを切りかえないと介護できない】【要介護者の体調管理は思うようにいかない】【家事や介護には慣れない】【女性物の衣類への抵抗感がある】【家族と意思の疎通ができない】【介護と仕事との両立ができない】【将来への見通しがつかない】であった。以下、それぞれのカテゴリーについて説明する。

1) 【要介護者と思うように意思が伝わらない】

息子介護者は、認知症の症状の対応の中で、「注意散漫だし、できるのにとぼけて知らん顔するんで

表1. 息子介護者一覧

	年齢	職業	介護年数	同居者の有無	要介護者年齢	要介護者疾病	要介護度	続柄
a	60歳代	無職	5	なし	80歳代	脳血管性認知症	2	母
b	60歳代	自営業	3	なし	80歳代	アルツハイマー	3	母
c	60歳代	非常勤職員	6	妻	80歳代	脳血管性認知症	3	父
d	60歳代	自営業	3	兄	90歳代	脳血管性認知症	5	母
e	50歳代	自営業	5	なし	80歳代	アルツハイマー	3	母
f	50歳代	会社員	2	妻	80歳代	アルツハイマー	1	母
g	50歳代	会社員	8	なし	80歳代	アルツハイマー	3	母
h	40歳代	会社員	5	なし	80歳代	アルツハイマー	2	母
i	40歳代	無職	10年以上	なし	80歳代	レビー小体型	4	母

表2. 息子介護者の感じる困難

カテゴリー	サブカテゴリー
要介護者と思うように意思が伝わらない	できると思えるのにやらない 何度言っても同じことの繰り返し ちぐはぐな言動の不可解さ 言い過ぎたことへの後悔
気持ちを切りかえないと介護できない	修行と思わないと気持ちが収まらない 怒らないと気持ちが収まらない
要介護者の体調管理は思うようにいかない	予期せぬ疾病発生の不安 要介護者自身が危険を回避できないことの心配
家事や介護には慣れない	日々行う家事は辛い 消えない排便処理の抵抗感
女性物の衣類への抵抗感がある	女性の衣類の買い物はしたくない 母の衣類には手を出しにくい
家族と意思の疎通ができない	家族との意見調整は難しい 家族と介護の大変さを共有できない
介護と仕事との両立ができない	介護が仕事に影響することの困惑 夜間不眠による集中力の低下と疲労感
将来への見通しが見えない	現状の生活をいつまで維持できるかの気がかり 今後の自己の体調の心配 自己の人生の見通しのつかない不安 介護継続のための経済的な気がかり

す(c氏)」と《できると思えるのにやらない》と感じていた。また、「気に入らないと『帰れ』とか、暴言をはくことがよくあるんですよ。だから、自分はしょっちゅう怒ってばかりいたんです(g氏)」と《何度言っても同じことの繰り返し》と怒りを覚えたり、「よく聞いていると所々つじつまがあわなかったりするんですけど、言葉が結構巧みで、本当と思える内容なんです。まあ不思議ですね(b氏)」と《ちぐはぐな言動の不可解さ》を感じていた。一方、時折苛立ちの中で声を荒げる時には、「ある時、〇〇についてつい怒ったら、姿が見えなくなって、心配して探したら廊下の隅にいたんです。できない自分が情けないって、かなり落ち込んでいてね。そういうことは、病気なりに認識しているんだな、言いすぎちゃったなと思って心が痛かったですね(f氏)」というように《言い過ぎたことへの後悔》を持つこともあった。このように日々認知症の症状に翻弄される中で、時折自己の対応に後悔しつつも伝えたいことが伝わらない辛さを抱えていた。

2) 【気持ちを切りかえないと介護できない】

息子介護者は、認知症の症状の対応等での葛藤を持つ中で「最初のころは、(夜間10回以上の排尿介助を)受け入れて介助していましたが、ずっと続くと修行しているような気持ちになってきました。大変だけどやるしかないという感じですね(i氏)」のように《修行と思わないと気持ちが収まらない》状況で介護をしていた。また、「認知症についてはわかっているけど、やっぱり怒ってしまうんです。言って発散しているだと思っんです。結果的にはそこで冷静さを取り戻しているんですよ(b氏)」と、《怒らないと気持ちが収まらない》のように、要介護者を怒ることで気持ちの冷静さを取り戻していた。このように息子介護者は、本来はよくないと思いつつも、心の持ちようや行動を変えなければ介護を継続できないという苦しさを抱えていた。

3) 【要介護者の体調管理は思うようにいかない】

息子介護者は、日々の介護の中で「訪問看護師から腰の真ん中あたりに床ずれがあるって言われて、こんなにすぐにできるんだと驚いてしまいました。

それに、自己判断で水を半消化態経腸栄養剤に変更したら高Na血症になってしまい、やり方が悪かったんですね (d氏)」などの《予期せぬ疾病発生の不安》や、「元々農家だったので気が向いた時は家の周りの草を取るんだけど、暑い日には水分を渡しておいても、草取りに夢中になって、飲まないんですよ (b氏)」などのように《要介護者自身が危険を回避できないことの心配》を抱えていた。このように、認知症のある要介護者が、健康状態を保ち安全に生活できるための管理の難しさを述べていた。

4) 【家事や介護には慣れない】

息子介護者は、「食事の用意をして片付けて買い物に行くと、なんてやっていると1日なんてすぐに過ぎてしまいます。朝が終わったらすぐ昼、また夜、それはさすがに非常に辛いことだなと思いましたね (i氏)」のように、《日々行う家事は辛い》ことを述べていた。また「尿の始末は慣れましたが、便はなかなか (d氏)と《消えない排便処理の抵抗感》を述べていた。このように、男性であるが故に、家事を含めた介護には中々慣れない大変さを抱えていた。

5) 【女性物の衣類への抵抗感がある】

息子介護者は、「困るのは、親子ですけど女性なので、着る物や女性の下着の買い物をどうしてもできないんです (h氏)」のように《女性の衣類の買い物はしたくない》を述べていた。また、「父の物は手が出しやすいけれど、女親の着る物や下着って、どこの引き出しに何が入っているかなんて知らないですから。妹に来てもらって、必要最低限の物だけわかるようにしてもらったんです (f氏)」のように《母の衣類には手を出しにくい》と述べていた。このように、異性である母親の衣類を触ることへの抵抗感を抱いていた。

6) 【家族と意思の疎通ができない】

息子介護者は、同居の妻に対して「(要介護者である)母が若いころ嫁を怒っていたけれど、今は立場が逆転したんです。だから僕は嫁との間に挟まって、いかに仲良くやっていくかの調整で苦労しますね。そういうことが一番つらいですね (a氏)」の

ように、《家族との意見調整は難しい》ことを述べていた。また「(別居している)妻とは同じ共有をしてないので、僕自身が母親の介護をしています。が孤立感を感じていました (e氏)」のように《家族と介護の大変さを共有できない》と述べていた。このように家庭内での家族の気持ちの調整をすることの難しさや、介護の辛さを共有できないと孤立感を感じていた。

7) 【介護と仕事との両立ができない】

息子介護者は、「これ以上日中一人にしておけない状態にまでなると、時々泊りの出張もあるし、仕事をやめようかと考えますね (h氏)」のように《介護が仕事に影響することの困惑》を持っていた。また「夜間眠らないで大騒ぎするときは、こちらも眠れませんし、集中力も落ちますから、日中も眠くて辛いんですね (d氏)」のように、《夜間不眠による集中力の低下と疲労感》を抱えていた。このように、仕事を継続するために要介護者を日中独居にさせることや、介護による夜間の不眠が仕事に影響する困惑を述べていた。

8) 【将来への見通しが見つからない】

息子介護者は、「気がかりは母親と自分の体調を維持して今の状況をいつまで保っていけるかということですね (a氏)」のように《現状の生活をいつまで維持できるかの気がかり》や、「僕がこの先、自分の体調も含めて母親を介護できるかどうか心配です (e氏)」のような《今後の自己の体調の心配》、「介護は、終わりが見えませんから、いつまでこんなことを続けているのか。実際終わりが見えたら、自分の残りの人生がどうなるだろうかと、ひどいことになるだろうな (i氏)」のような《自己の人生の見通しのつかない不安》を述べていた。また、「後期高齢者保険が今年も1年で〇〇円値上がりして、経済的にも気がかりですね (g氏)」と《介護継続のための経済的な気がかり》を述べていた。このように、要介護者よりも年齢が若い息子介護者は、今行っている介護は元より、自分の人生も含めて先の見えない不安を抱えていた。

VI. 考 察

認知症の親を介護している息子には、介護生活における困難として【要介護者と思うように意思が伝わらない】【気持ちを切りかえないと介護できない】【要介護者の体調管理は思うようにいかない】【家事や介護には慣れない】【女性物の衣類への抵抗感がある】【家族と意思の疎通ができない】【介護と仕事との両立ができない】【将来への見通しが見えない】が抽出され、実際の体験から介護生活における息子介護者の、より具体的な困難が明らかとなった。また、介護を請け負った理由はそれぞれだが、現在は自己の役割として捉えており、介護に向き合う姿勢は同様にとらえた。以下、「要介護者の認知症の症状への対応に関連する困難」「介護を含めた日常生活に関連する困難」、「息子介護者の今後の生活に関連する困難」に沿って考察する。

1. 要介護者の認知症の症状への対応に関連する困難

認知症とは、「通常、慢性あるいは進行性の脳疾患によって生じ、記憶、思考、見当識、理解、計算、学習、言語、判断など、多数の高次機能障害からなる症候群」（日本神経学会、2017）であり、種々の症状により日常生活に支障をきたす。本研究の息子介護者も、日々の要介護者との対応の中で、【要介護者と思うように意思が伝わらない】という困難を抱えていた。認知症の行動心理症状は、患者自身の欲求の表れでもあるが（淵田、2009）、その意味が理解できなければ周囲の者の戸惑いは避けられない。本研究においても、小澤（2003）が述べるように、要介護者と息子介護者の間に“やれるのにやらないと思ひ込んでいるというズレ”や“期待と現実のズレ”からすれ違いを生んでいた。本研究の息子介護者全員が親の認知症の罹患については認識していたが、いろいろな場面における困惑は、要介護者の多彩な認知症の症状と、介護者の認知症の症状の認知及びその対応にズレがあったためと考えられる。また横瀬（2010）は、親である母親と患者である母親の両義性の中での混乱から虐待への可能性もあると述べ

ている。このように、元気な頃の親の姿からの期待と現実のズレも存在したと推測できた。そのような中で、修行と思わないと収まらない気持ちや怒らないと収まらない気持ちを抱え、【気持ちを切りかえないと介護できない】という困難を抱えていた。

2. 介護を含めた日常生活に関連する困難

本研究では、9名中8名の息子が母親の介護を行っていた。また6名が同居者がなく、そのうち5名は単身の息子であった。母の認知機能が低下したことで、食事の支度・買い物・家事等の実施が困難となり、息子が代わりに行う状況が見られた。息子介護者は、いつまでたっても【家事や介護には慣れない】と感じていた。

日本では夫は職業的役割を担い、妻は家内役割を担うという「性別役割分業制」が主にとられてきた（春日、2001）。近年ではその意識も徐々に変容していると思われるが、男性介護者の場合、慣れない家事労働は介護者に非常に大きな負担となる（森、2008）、との報告もある。その事からも、家事や介護の不慣れ感には、性別役割分業にかかわる役割意識の強さが影響しているのではないかと考えられた。また、平山（2017）は息子について、父親に対しては依存的な存在ではないが、母親に対しては常に子である自分を気にかけて世話をしようとする“ケアする存在である”という意識から抜けきれない、と述べている。本研究では9名中8名が母親の介護であることから、息子介護者の意識の中に母親への依存心があり、介護が長期間にわたっても家事や介護の不慣れ感を感じるのではないかと推測できた。

また介護における他者への身体的接触について、山田（1992）は女性介護者の場合には母性的ケアの意味づけで捉えられるが、男性介護者の場合は性的な意味づけが付与される、と述べている。本研究の息子介護者の【女性物の衣類への抵抗感がある】においても、身体接触とまでは行かなくても、女性である母親の衣類や下着に触れる事に関して同様の抵抗感があり、同じ男性介護者でも夫との相違であると思われた。

さらに、今まで家事経験が少なく介護も初めての状況である息子介護者は、【要介護者の体調管理は思うようにいかない】と感じていた。具体的には排便コントロールがうまくいかないことや、褥創や電解質バランスの異常を併発したこと等から、体調管理に対する不安を持っていた。

さらに、教育や仕事の場面で自立を強いられ、合理性や効率性に基づく生活スタイルを習得した男性は、SOSのサインを出すのが苦手な傾向がある（斉藤，2010）。本研究の息子介護者は、家族との関係性の中で【家族と意思の疎通ができない】と感じていた。平山（2014）は、同居している息子介護者の妻は、今までの義父母との生活でストレスを感じていたため、介護に対して夫やその親と距離を置き最終的には完全に関わらないようになった、と述べている。本研究でも妻とは別居して母の介護を行う人や、同居であっても主介護者の息子が、立場が逆転した母と妻との仲介の困難を感じていた方もいた。これらのことから息子介護者は、助けを求めない傾向に加え、かつ家庭内での理解が薄い状況もあり、孤立感を感じていたのではないかと思われた。

このように、3世代世帯同居は減少しているものの、中高年男性家族では親と同居夫婦も未だ見られる。そのような中で、若い頃からの嫁姑の関係性から力関係が逆転したうえでの、関係性の調整についての息子（妻に対する夫）の思いや、あえて夫婦が別居をして息子が介護するときの孤立感については、今まで報告されていないことであり、新たな知見である。

3. 息子介護者の今後の生活に関連する困難

本研究の息子介護者は、9名中7名は職業に従事しており、【介護と仕事との両立ができない】と感じていた。また、介護や自己の人生や経済面等から【将来への見通しがつかない】と思っていた。

介護は、相手の症状やニーズに合わせて断続的・間歇的に行うため、自分で仕事のペースが決められない特徴がある（袖井，2008）が、男性は介護をしている状況であったとしても、企業社会においては

男性的な働き方が期待される現状も有る（松井，2014）。そのためか、本研究の就業している息子介護者も、日々の生活の中に仕事と介護を組み入れていくことの困難を抱えていた。また、介護は先の見通しがつきにくく生活設計が難しい（袖井，2008）ことから、要介護者よりも一世代若い本研究の息子介護者は、介護がいつまで続くかわからず自己の人生設計への不安を抱えていた。

このような困難を抱えている中、2017年には仕事と育児や介護の両立を目的とした「育児・介護休業法」が改訂されたが（厚生労働省，2018）、要介護者の病状・背景や介護者の背景等千差万別であり、制度などを活用しつつ、更なる個別的な支援が求められる。

VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究の参加者は同様な居住地域のため、介護生活における困難も地域性がある可能性があった。また、参加者である息子介護者は9名であることや、年齢幅や介護期間、要介護者の性別の偏り、同居家族の有無、仕事の有無、既婚の有無等に相違があった。更に、本調査で抽出したカテゴリーとサブカテゴリーは介護者が息子である場合に特有といえるものではなかった。しかし、息子が就労可能な年齢も考慮すると介護と仕事の両立や、将来の見通しなどについては介護者が夫である場合と程度が異なることも考えられる。そのため、今後更に息子介護者への調査を重ね、その特徴を検討する。

VIII. 結論

認知症の親を自宅で介護する息子介護者は、要介護者に対して【要介護者と思うように意思が伝わらない】ことや、介護生活では【気持ちを切りかえないと介護できない】こと、【要介護者の体調管理は思うようにいかない】こと、【家事や介護には慣れない】こと、【女性物の衣類への抵抗感がある】こ

と、【家族と意思の疎通ができない】こと、仕事を
している息子介護者は【介護と仕事との両立ができ
ない】こと、さらに【将来への見通しが見えない】
こと、という困難を感じていた。

謝辞

本研究に快くご協力くださいました皆様に深く感謝いたします。
なお、本研究は2017年国際医療福祉大学大学院の博士論文の
一部を加筆・修正したものである。

各著者の貢献

KNは、研究の着想と企画・データ収集・分析・解釈、論文執筆
の全プロセスを担当した。

MAは、研究の計画・データの分析・解釈の助言・指導、お
よび論文のレビューを行った。

NCは、データの分析・論文のレビューを行った。

〔受付 '18.05.23〕
〔採用 '19.03.05〕

文 献

- 淵田英津子：認知症高齢者の行動・心理症状（BPSD）に対
する家族支援のあり方，家族看護，7(1)：50-54, 2009
- 彦 聖美，鈴木祐恵，金川克子他：高齢期の妻や親を介護
する男性の介護状況に関する実態調査—石川県における
介護支援専門員に対する質問紙調査—，石川看護雑誌，
10：37-46, 2013
- 平山 亮：迫り来る「息子介護」の時代—28人の現場から—，
41-82, 129-216, 光文社新書，東京，2014
- 平山 亮：介護する息子たち，1-34, 勁草書房，東京，2017
- 春日キスヨ：介護問題の社会学，31-51, 岩波書店，東京，
2001
- 厚生労働省：H22年国民生活基礎調査の概況。http://www.
mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa10/4-3.html.
2018年3月8日
- 厚生労働省：平成27年度 高齢者虐待対応状況調査結果概
要。http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-1230
4500-Roukenkyoku-Ninchishougyakutaiboushitaisaku
suishinshitsu/0000155596.pdf. 2018年3月8日
- 厚生労働省：H28年国民生活基礎調査の概況。http://www.
mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/dl/16.
pdf. 2018年3月8日
- 厚生労働省：育児・介護休業法のあらまし。https://www.
mhlw.go.jp/content/11909000/000355354.pdf. 2019年1月

14日

- 国立社会保障・人口問題研究所：人口統計集。http://www.
ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P_Detail2017.asp?
fname=T06-23.htm&title1. 2018年3月8日
- 松井由香：男性介護者の語りにみる「男性ゆえの困難」—セ
ルフヘルプ・グループに集う夫・息子介護者の事例から，
家族研究年報，39：55-73, 2014
- 森 詩恵：男性家族介護者の介護実態とその課題，大阪経
大論集，58(7)：101-112, 2008
- 長澤久美子，山村江美子，岩清水伴美：認知症に罹患した
妻の介護をする夫介護者が感じている困難，家族看護学
研究，20(2)：117-124, 2015
- 内閣府：平成29年高齢者白書。http://www8.cao.go.jp/
kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/s1_1_1.html.
2018年3月11日
- 日本神経学会：認知症疾患診療ガイドライン2017。https://
www.neurology-jp.org/guidelinem/degl/degl_2017_01.
pdf. 2018年8月16日
- 小澤 勲：痴呆を生きるということ，151-184, 岩波新書，
東京，2003
- 齊藤真緒：男性介護者調査研究から見えてきたこと—家族
介護支援とのかかわりを中心に—，認知症ケア最前線，
24：36-41, 2010
- 新村出編：広辞苑，岩波書店，東京，2008
- 袖井孝子：家族介護は軽減されたか，（上野千鶴子，大熊由
紀子，大澤真理他），家族のケア家族へのケア，135-153，
岩波書店，東京，2008
- 総務省：H29年度版 高齢社会白書。http://www8.cao.go.
jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/s1_2_1.html.
2018年3月8日
- 鈴木祐恵，彦 聖美，金川克子他：訪問看護ステーション
利用者を介護している石川県下の男性介護者の実態と介
護に対する意識—自記式質問紙調査から—，石川看護雑誌，
10：65-75, 2013
- 宇多みどり，都筑千景，金川克子：訪問看護を利用してい
る男性介護者の実態と支援ニーズ—夫介護者と息子介護
者の比較による検討—，神戸市看護大学紀要，21：49-59，
2017
- 上田照子，荒井由美子，山西利政：在宅要介護高齢者を介
護する息子による虐待に関する研究，老年社会科学，29
(1)：37-47, 2007
- 上田照子，三宅真理，西山利正他：要介護高齢者の息子に
よる虐待の要因と多発の背景，厚生の指標，56(6)：19-
26, 2009
- 山田昌弘：福祉とジェンダー—その構造と意味—，家族研
究年報，17：2-14, 1992
- 横瀬利枝子：介護施設利用に至るまで—認知症の母親への
息子の対応—，生命倫理，20(1)：76-84, 2010

Difficulties Perceived by Sons Caring for Their Parents with Dementia at Home

Kumiko Nagasawa¹⁾ Mikako Arakida²⁾ Noriko Chiba¹⁾

1) Department of Nursing, Faculty of Health Science, Tokoha University

2) School of Nursing and Rehabilitation Science at Odawara International University of Health and Welfare

Key words: caregiving sons, home care, difficulties, dementia

With elderly population growth, the number of elderly persons with dementia is increasing in Japan. Regarding family structures, households consisting of parents and unmarried children are increasing, and the proportion of those who have never married during their lifetime is growing among males. Therefore, it is expected that the number of sons caring for their parents at home (caregiving sons) will also increase in the future. Caregiving sons have been reported to be involved in approximately 40% of all elderly abuse cases. In addition to increasing care worker turnover rates, the management of these sons may be a future challenge.

To clarify care-related difficulties perceived by sons caring for their parents with dementia at home, we conducted semi-structured interviews with 9 caregiving sons, and qualitatively and descriptively analyzed the obtained data.

The caregiving sons experienced distress due to [difficulty in conveying their intentions with the care-receiver] and [the necessity of focusing on care] when caring for him/her. They also faced [difficulty in managing the care-receiver's physical condition], [difficulty in becoming familiar with housework and care], [resistance to female clothing], and [difficulty in communicating with other family members]. Those working also perceived [difficulty in coordinating caregiving and work], and developed [anxiety over an unclear outlook for the future].